

# 戦時下『少女倶楽部』の短歌欄

—少女たちの「みたみわれ」—

高橋美織

はじめに

一九四四（昭和一九）年一二月号の『少女倶楽部』<sup>(1)</sup>巻頭頁を飾ったのは、「勝ちぬく誓」であった。

みたみわれ 大君にすべてを捧げまつらん

みたみわれ すめらみくにを護りぬかん

みたみわれ 力のかぎり働きぬかん

みたみわれ 正しく明かるく生きぬかん

みたみわれ この大みいくさに勝ちぬかん

「愛国百人一首」にも選出された海犬養宿祢岡麻呂の「御民われ生ける験あり天地の栄ゆる時にあへらく思へば」<sup>(2)</sup>（『萬葉集』巻六・九九六）は、「海ゆかば」を国民歌に制定した大政翼賛会が曲を募集、一九四三（昭和一八）年四月二六日に「国民の歌」

とした。<sup>(3)</sup>さらに同年、冒頭の「みたみわれ」が、国民の士気を上げることを目的にした朗唱文「勝ちぬく誓」に用いられることになったのである。

「総進軍「勝ちぬく誓」」第四回中央協力会議<sup>(4)</sup>総常会は三日間にわたる決戦審議を尽して十六日夕刻閉幕するに当り、議員一同が協議の成果を実践に移し必勝の決意をもつて総進軍すべく大橋八郎氏以下十五名の起草委員を挙げて案文を練ったのち左の如き「勝ちぬく誓」を総常会の名において全会一致可決した。<sup>(5)</sup>（『朝日新聞』朝刊 一九四三・七・一七）

「勝ちぬく誓」については、都道府県、五大都市の大政翼賛会支部長に「今後部落会、町内会、隣保班等ノ常会ニ於テハ勿論各級協力会議其ノ他各種ノ会合ニ於テモコレヲ朗読スルヤウ指導相成リ」と、七月二三日付で事務総長丸山鶴吉が通達を出

している。翌月の「週報」情報局編（一九四三・八・四 内閣印刷局）の巻頭頁には「勝ちぬく誓」と、「七月一六日第四回中央協力会議で決定されたもので、我々はつねに朗誦して、決戦下の決意を固めませう」という一文が早くも掲載されており、

この「勝ちぬく誓」を迅速に広めようとしていたことがわかる。また、全国の会合だけではなく、女学校においても「勝ちぬく誓」は朗誦されていたという。当時、沖縄県石垣島の八重山高等女学校一年生であった宮里テツの一九四三（昭和一八）年

一月八日の日記にも、大詔奉戴日の日に「勝ちぬく誓」を朗誦したという記述がある。したがって、通達からわずか数か月で、離島を含めた全国に浸透していたということがわかる。

ちょうどその頃、『少女倶楽部』をはじめとした少女雑誌も少年雑誌や他の雑誌同様に、戦時色の強い誌面構成となっていた。それは短歌欄も同様であった。

本稿では、『少女倶楽部』の短歌欄に注目し、その選歌の傾向や歌人による解説文を手がかりとして、戦時下の少女雑誌の短歌欄の果たした役割の一端を示すことを目的とする。

## 一 女性歌人による短歌文芸欄

『少女倶楽部』には、他雑誌によくみられるような読者の短歌投稿欄は、単発的なものが時折ある程度で、主に女性歌人が自作の歌や有名歌人の歌を文章とともに紹介する短歌文芸欄が存在していた。それは昭和一二年以降も、「私の好きな名歌」「私

の好きな歌」、「和歌解説」と名前を変えながらも、一九四三（昭和一七）年まで続いていた。

「支那事変」が起こった年である一九三七（昭和一二）年一月から、一九四三（昭和一八）年二月までの、女性歌人別短歌文芸欄は次のようになる。本章では、選歌数の多い茅野雅子、若山喜志子、柳原燐子、中河幹子を中心に、その推移を追っていく。

茅野雅子 「私の好きな名歌」昭和一二年一〜一〇月

「私の好きな歌」昭和一二年一月、昭和一六年二月

「和歌」昭和一五年一二月

水町京子 「秋の和歌」昭和一二年秋の増刊

若山喜志子 「私の好きな歌」昭和一三年一〜一二月

「和歌解説 母を思ふ歌」昭和一七年三月

柳原燐子 「私の好きな歌」昭和一四年一月〜一五年一月、

一六年三月

「春の歌」昭和一四年新春増刊

「五月の歌」昭和一四年臨時増刊

「私の好きな秋の歌」昭和一四年秋の増刊

「和歌」昭和一五年八月

中河幹子 「私の好きな歌」昭和一五年三、五、九月、昭和

一六年一、六月

「和歌」昭和一五年七月、一一月



「和歌解説 牡丹」昭和一七年五月

四賀光子 「私の好きな歌」昭和一五年四、六月

「つゝ、しみて読む」昭和一六年七月

今井邦子 「私の好きな歌」昭和一六年四月

五島美代子 「私の好きな歌」昭和一六年八月

「まごころの歌」昭和一七年二月

「和歌解説 大きしづかさ」昭和一七年九月

北見志保子 「私の好きな歌」昭和一六年九月

「和歌解説 油蟬」昭和一七年七月

川口千香枝 「私の好きな歌」昭和一六年一月

川上小夜子 「十二月の歌」昭和一六年二月

斎藤史 「和歌解説 日本のうた」昭和一七年一月

「少女和歌朗詠読本」昭和一八年二月

一九三七（昭和一二）年一月から、茅野雅子の「私の好きな歌」の連載が始まる。それ以前、一九三五（昭和一〇）年一月号（一三巻一号）から翌年一二月号（一四巻二三号）では、毎回季節に応じた題と挿絵をつけ、雅子の短歌作品に解説文をつける形をとっていたが、この年は見開き二頁に、明治から昭和にかけての有名歌人の歌や、古典和歌を三首から五首掲載し、解説をつける形に変わった。

同年七月の盧溝橋事件を受け、「少女倶楽部」の一〇月以降は、「支那事変」の特集記事が誌面を飾るようになる。一〇月号には付録に「日支事変少女新聞号外」、グラビアに「日支事変大

画報」が掲載された。<sup>6</sup>同号の「私の好きな歌」は佐佐木信綱の歌を四首取り上げているが、秋の風景を詠んだ歌であり、戦時色はない。一〇月一五日発行の「秋の増刊号」でも、短歌欄では、雅子ではなく水町京子が「秋の和歌」として北原白秋、古泉千樫、釈超空の三首を紹介しており、戦争詠は含まれていない。だが、一月号では、雅子は「日本も止むにやまれぬ正義のため、東洋の平和のため、戦はねばならなくなりました。皆さんのお親しい方の中に、いな、お兄さまお父さまも出征された方々もあるかと思ひます。さうした留守をされてゐる人の心持をあつかつた歌を少しあげてみませう」と、斎藤茂吉の四首を挙げている。

はるばると母は戦をおもひつつ桑の木の実の熟める畑に書よみて賢くなれと戦場のわが兄は錢をくれたまひけり戦場の兄よりとどきし錢もちて泣きあたりけり涙おちつつ真夏日の畑の中にわれをりてたかふ兄をおもひけるかな

いずれも勇ましい歌ではなく、読者である少女たちが共感しやすい歌である。なお、この回のみ題が「私の好きな名歌」ではなく「私の好きな歌」となっていたり、加藤まさをの挿絵も読書をする質素な姿の少女が描かれているなど、それまでの連載とは異なる雰囲気を出している。この回は戦時下であるということを少女たちに意識させるための編集部の意図があつたのではないだろうか。

一二月は再び「私の好きな名歌」に戻る。四首のうち、一首目の九条武子の歌は、天皇賛美の歌である。

大君は天つ日のごとしものみなをただおほらかにめぐみおはす

雅子は「この歌の大君といふのは勿論天皇様のごとで、天皇様は、丁度あの天に輝く太陽のやうにすべてのものに限りない慈愛をもつてはぐくみいたはつて下さいませ。と天皇様の御恵の深いのを感謝する気持ち溢れてゐます」と、少女向けの平易な解説をしている。連載が終了しても、雅子は単発的に『少女倶楽部』に原稿を寄せたが、最後まで少女たちにわかりやすく伝えるという姿勢は変わらなかつた。

一九三八（昭和一三）年一月から一二月までは、増刊号を除き、全一二回を「私の好きな歌」という題で若山喜志子が担当した。雅子との違いは有名歌人の歌を減らし、主に無名の少女や女性たちの歌を載せるようになったことである。その中には戦争詠はなく、季節の風景や日常を詠んだ歌を取り上げている。

庭隅の紫陽花の花を濡らしつつ昨日も今日も雨ふりしきる

香川春子（一九三八・六）

「紫陽花の花は皆さんもご存知でせう。六月の梅雨期に咲く手鞠の形をした美しい空色の花ですが、この花は雨の降る中に咲いてゐる姿が一番美しいのです。昨日も今日もといふのは毎

日といふと同じです。雨ふりしきるのしきるといふのは類りにといふのですから、しきりに雨が降ると解すればよいのであります」という丁寧な喜志子の解説もまた、平易な口調で少女たちに語りかけるようである。

彼女がこの一年で唯一「萬葉集」から選んだのは、三月号に掲載した大伴家持のこの一首であつた。

うらうらと照れる春日に雲雀あがりころがなしも一人し  
おもへば  
（巻一九・四二九二）

「このお歌は今から千年も昔の有名な歌人の大伴家持といふ人の雲雀を詠まれた一首です」と、家持を知らない年少の読者に作者の説明をし、「たとへ意味が解らなくても口誦さんである間に必ずお解りになる歌ですからよく覚えて頂きたくここに書いておきました」と、今は難しくても覚えておいてほしい、としている。

喜志子は女性たちの日常の歌を選んだ。少女たちにとつても、歌を身近に感じられた一年だつたであろう。また、戦争詠を掲載しなかつた喜志子の欄は、戦時下であるということ忘れさせるような側面があつた。それが意図的なものであつたかどうかははかりかねるが、誌面の中で異彩を放っていたのは確かである。

その後、喜志子は懸賞短歌の選者や「和歌解説 母を思ふ歌」（一九四二・三）を担当した。「母を思ふ歌」では、無名兵士の

歌を一首挙げてゐる。

わが母の形見の写真身につけて心は勇む敵陣深く

「母と共にある、といふ安心と感激とが千人力となつて、勇敢に敵陣深く突入して行つた、又行くこともできるのだといふ大信念は、何とつぱである、ありがたいことでせうか。まことにまことに偉大なるは母の愛なのであります」という解説は、死をも恐れぬ勇敢さを推奨しているようにも受け取れる。かつて戦争詠を避けていた喜志子も、他の歌人同様に、このような歌を選ばざるを得ない状況下に置かれていたのだろうか。

一九三九（昭和一四）年一月から翌一五年一月まで、「私の好きな歌」を担当した柳原燐子は、喜志子とは逆に戦争詠を多く取り上げた。前年（一九三八）年に兵士と銃後の歌を収めた歌集『塹壕の砂文字』を出版するなど、戦争と深くかかわっていた燐子からすると、当然のことであろう。三度の増刊号を含む一五回にわたり、その傾向は変わらなかつた。

連載第一回目である一月号では、早速兵士の歌を選んでゐる。

雑踏に一刻れのこる水砂糖名残のこさでたべ畢へて行く

（斥候に出るとて）

菊池源武（一九三九・二）

燐子は「作者は今第一線に戦つてゐる人です。今日あつて明日を思はないのが戦場のならひ、かういふ歌はまなか私が見て明するより、読まれる人めいめいが考へた方がよいのです」と、

やや突き放したような解説をしている。

一九四〇（昭和一五）年二月号以降は、複数の女性歌人が交代で欄を担当するようになる。翌一九四一（昭和一六）年、七回を担当したのが中河幹子である。幹子を選んだ歌の半数は戦争詠だが、解説文は次のような平易な表現に徹していた。

ハーモニカ雑囊に入れてゆきたれば月の宵ごろは思ひかな  
しも  
桐田蔭村（一九四〇・三）

出征のとき、あの子がいつもふいてゐたハーモニカを雑囊に入れていつたので、月のいゝ夜は、あの子がハーモニカをふいてゐるかしらと思はれて胸が一ぱいになる。親子を思ふ歌であります。皆さんにはまだしつくりわからないでせうけれど、私などは涙がにじむほど感じる歌です。

今井邦子は、『令女界』で「萬葉読本」を連載（一九三八・八―一九四〇・四）していたこともあつてか、「私の好きな歌」は一九四一（昭和一六）年四月の一度だけの登場である。それでも、『萬葉集』から「磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君が在すと言はなくに」（巻二・一六六）を挙げ、この一頁に見開き二頁のうち一頁を使い、物語風に丁寧に解説をしている。

斎藤史は、一九四二（昭和一七）年一月の「和歌解説」では四首の戦争詠を取り上げ、翌年二月号に「少女和歌朗詠読本（愛国百人一首より）」を執筆した。八首を「愛国百人一首」から挙げており、そこに「御民われ」と「今日よりは顧みなくて

大君のしこの御楯と出で立つ吾は」(巻二〇・四三七三)を並べて載せている。「萬葉集六にあるこの有名な歌、それから、次の防人の歌などは、もう皆様も、愛国歌などの註釈でござんじのことと思ひます」と、読者がすでにこれらの歌を知っていることを前提としていることから、この二首の知名度の高さがうかがえる。さらに、同号の「編集部だより」には、これらの歌を「大君に仕へまつて来た、われら民族の、おほらかゆたかな忠義の精神を知つていたゞくために」掲載しており、「朗詠読本と天皇を讀へ奉る歌は、空でおほえ、声高く朗誦して下さい」と、朗誦を推奨する記述がみられる。

一九三七(昭和一二)年一月から続いた「私の好きな歌」は、一九四〇(昭和一五)年七月から九月、十一月、二月号で「少女詩歌読本」内の「和歌」と題し、挿絵の上に歌を掲載するという体裁に変わった。翌年一月から四月、六月から九月、十一月は再び「私の好きな歌」という題に戻るが、一二月の川上小夜子は「十二月の歌」という題になっている。そして一九四二(昭和一七)年二月に「まごころの歌」(五島美代子)となる。その後も数首を選び、解説をするという形は変わらないものの、若山喜志子、中河幹子、北見志保子、斎藤史による「和歌解説」という題に変わった。これは、「私の好きな歌」の「好き」という言葉に感じる甘い響きが、戦時色が強まる誌面や、戦争詠の多い短歌欄に適さなくなっていたことからの改称ではないかと推察できる。

一方で、それまで単発的に行われていた短歌の読者投稿欄が、一九四二(昭和一七)年一月号から翌年一二月号まで、五島美代子を選者に迎えて毎月掲載されることになる。そこに掲載された少女たちの歌も見られるべきものが多いが、その内容については別稿に譲りたい。

## 二 看護婦の歌

日本軍の戦況が厳しくなるにつれ、『少女倶楽部』の誌面には愛国心あふれる銃後の少女や、看護婦を主人公とした小説、看護婦の職場探訪などの記事が増加していった。

短歌欄においても、看護婦の詠んだ歌が九首選ばれている。それらは一九三九(昭和一四)年六月から一九四二(昭和一七)年にかけてみられ、数は少ないものの、印象は強い。

いち早く看護婦の歌を選んだのは、柳原燐子であった。『少女倶楽部』の短歌欄を担当した歌人たちの中で、最も戦争詠を掲載している燐子は、「私の好きな歌」を始める前年の一九三八(昭和二三)年九月に、歌集『塹壕の砂文字』を出版し、一九四〇(昭和一五)年七月発行の、看護婦・古屋糸子の歌集『白衣魂』(秋豊園出版部)<sup>(1)</sup>には書簡を寄せている。

その古屋糸子の歌を、燐子は二首選んでいる。

この船をあすは別るるこの身なり今日一日をあまやかして  
と 「私の好きな歌」一九三九・五

刻々に祖国に近くなりければ嬉し悲しの兵は眠らず

「私の好きな歌」一九三九・九

病院船で働く様子を詠んだこの二首は、『白衣魂』にも収録されている。燦子は一首目について、「出征の看護婦さんたちはみんなこのやうに傷病兵のお母さん、お姉さんのつもりで身のつかれも苦しさも忘れて死物ぐるひで働いてゐるのです」、二首目は「看護婦さんたちは、お母さんが子供をなだめるやうに、『さあさあ皆さん、よくお眠りなさいよ。』といつて、おせわなさるのです」と、看護婦が母性溢れる職業であることを強調している。

さらに燦子は、陸軍第一病院の看護婦であるという後藤ふみよの歌を二首、名前のない看護婦の歌を一首挙げてゐる。

勇士らと一日遊びてつかれたるゆくてに黒き夕やけの富士

後藤ふみよ「私の好きな歌」一九三九・一二

いとまあれば点字ひたすら学びませとす、めつ、私の涙ぐみたり  
後藤ふみよ「私の好きな歌」一九四一・三

鈴蘭の花と数えて戦盲の君にその花にぎらせにけり

不明「私の好きな歌」一九三九・一〇

幹子は一九四〇（昭和一五）年一月の「和歌」で、看護婦の歌を取り上げた。

めしひにておはせば悲し はしなくも月美しといひたる後

に 早川八重子「和歌」中河幹子 一九四〇・一一

この「和歌」は、見開き二頁の右頁に飛行兵の歌、左頁に看護婦の歌という構成で、歌と解説の歌の上に、白衣の看護婦とベッドに横たわる兵士の姿が描かれている。幹子は「これは白衣の天使の方の歌ですが、どんなに細かいお心づかひをして傷兵のお世話をしてゐてくださるか、この一首からでもよくわかります。看護婦さん、ほんとにありがとうございます」と、看護婦の仕事がいかに尊いものかということを述べている。

当初は「白衣の天使」の印象が強い歌が選ばれていたが、歌人たちは次第に生々しい戦場を詠んだ歌を取り上げるようになった。

いだしきあひてたゞ言葉なくよろこびぬ我等は勝てり我等は勝てり

丘三代「私の好きな歌」川口千香枝 一九四一・一一

早く俺を漢口の方に向けてくれと戦盲の兵は起き上りたる

八代かの江「私の好きな歌」五島美代子 一九四一・八

まなかひに落ちて火を吹く焼夷弾いまは恐れずみとりす我は

岩田しげ子「和歌解説まごころの歌」五島美代子

一九四二・二

特に美代子の選んだ二首は、それまでの看護婦の歌とは異なる



り、あまりにも現実的であるが、看護婦の素晴らしさを語ることは忘れていない。上海の病院で詠まれたという「まなかひ」の歌について、美代子は「日本婦人の雄々しさ、けなげさが、そのま、歌の調子にも出てゐます」とし、「御国のため、任務のために一心不乱になつてゐられることがよく出てゐて、しかもどこやらに女らしいやさしさもうかゞはれます」と、作者の人物像を褒め称えているのである。

長谷川潮は、一九四四（昭和一九）年に掲載された看護婦作品から「何がなんでも従軍看護婦に関心を持つてほしい、いや、従軍看護婦になつてほしい」という軍の強烈的な意思がここにはある」と、意図的なものがあつたと指摘している。また、亀山美和子は看護婦の小説や記事がさまざまな少女・女性雑誌に登場していったことについて、「看護婦の専門職業性を紹介するのはなく、あくまでも戦時救護に関する美談などが主体であり、若い女性や少女たちに看護婦に対する憧れや志願を促す役割の一翼を担うものだったといえよう」と述べている。

したがつて、誌面に看護婦の記事が多くなつていったのは、ある程度の軍の要望があつたとみるのが自然であろう。そして短歌欄も同様であつたと考えられるのである。

戦況の悪化とともに看護婦不足が進む中で、日本赤十字社は一九四三（昭和一八）年に臨時救護看護婦の大量採用を行なうなどの対策を取つたが、ついに女学校の卒業生に看護婦免許を發行することとなつた。

「女学校の卒業生に看護婦の免許 明後年の春から適用」  
男子学徒はみな銃をとつて戦場へ赴くとき、女子学徒はことごとく銃後の看護婦たらねばならぬ、文部省および厚生省ではこの趣旨から女子中等学校における「看護教育」を強化し、卒業免状にいま一本看護婦免状を添へて授与し、一朝有事の際微動だにせぬ銃後の護りを固めることになつた（後略）。（朝日新聞「朝刊 一九四三・一二・二九」）

こうして、看護婦に憧れた少女たちが、あと数年で実際に「白衣の天使」になれる機会が生まれたのである。

しかし、「少女倶楽部」の誌面では、看護婦の物語は一九四四（昭和一九）年六月号の『野戦病院の折鶴』を最後に姿を消し、雄々しい特攻兵士の小説などが目立つようになる。一方で、短歌欄もほぼ消滅してしまふ。一九四四（昭和一九）年は、八月号と九月号に木俣修が「幕末愛国女性の歌」、翌年は五・六月号で木俣が特攻隊勇士の歌を紹介しているだけである。これらは、『少女倶楽部』に掲載されていたそれまでの歌と比較すると、少女たちとの距離を感じてしまふ題材と言わざるを得ない。短歌欄を含めた誌面は、日に日に厳しくなる戦況を反映して、少女たちに現実の厳しさを突きつけるものへと変わつていったのである。

#### おわりに

「勝ちぬく誓」が『少女倶楽部』に掲載された一九四四（昭

和一九)年は、サイパン島守備隊と一般住民の全滅、米軍のレ  
イテ島上陸といった苦しい戦いが続いた年だというだけではな  
く、一月に初の東京大空襲に見舞われるなど、いよいよ本土  
決戦が現実味を帯びてきたころである。加えて、八月には「女  
子挺身勤勞令」により女子挺身隊が強制加入となり、一二歳以  
上四〇歳以下の参加が義務づけられるようになっていた。その  
ような時期に、前述のようにすでに少女たちに浸透していた「勝  
ちぬく誓」をあえて載せたのは、いっそう気を引き締め、非常  
時に備えてほしいという軍部の意向が反映されたからだと推察  
できる。

「私の好きな歌」を担当した女性歌人の多くは、『現代代表女  
流年刊歌集 附女流銃後歌集』(一九三八・二二 歌壇新報社)  
や『支那事変歌集 銃後篇』(一九四一・一〇 大日本歌人協会)  
『現代代表女流銃後歌集』(一九四二・二二 歌壇新報社)にも  
参加し、銃後の決意や愛国心溢れる歌を発表している。その事  
実から、『少女俱樂部』において、歌を通して少女たちに戦争  
協力を求めたと指摘されてもやむを得ないのかもしれない。だ  
が、戦時下において彼女たちに求められたのは、雑誌の中で、  
少女たちの戦意昂揚の手助けをすることであつたともいえよう。  
それは発表媒体が減少した戦時下という時代の中で、軍や出版  
社の要望に応え、歌人として生き残る方法を模索した結果で  
あつたのかもしれないのである。

だが、少女たちの多くは、それらの歌を素直に受け止めていっ

たと思われる。銃後を守り、御国のために働くということは当  
然であるという考えは、『少女俱樂部』や他の少女雑誌の短歌  
投稿欄の歌にも反映されていっただのであつた。

大伴家持の「海行かば」について、小松靖彦は「極限的な(生)  
の形に、戦争下の人々は(死)への不安と恐れを乗り越える術  
を強く求めた」と分析している。さらに、小松は「みたみわれ」  
について、本来の歌の意味である「聖武天皇の繁栄する御代に  
生まれ合わせた、天皇の民としての喜び」が、戦時下の歌人た  
ちが詠んだ「御民我」を初句に置く歌が「あたかも天皇への民  
の言立て(誓いの詞)のようである」と、「天皇の民として戦  
い抜く「国民」の決意を示した」ものであると指摘している。

少女たちにとって、「みたみわれ」を暗誦することは、不安  
を払拭し、国民として銃後を守る決意を、より強固なものにす  
ることであつた。前述の宮里テツは、後に「(海ゆかば)は戦  
争に行く人がうたう歌(みたみわれ)は銃後の人の歌」と語つ  
ている。「銃後の人」であつた少女たちは、「みたみわれ」を口  
ずさみながら、戦争という大きな渦の中にそれぞれが巻き込ま  
れていっただのである。

#### 注

(1) 大日本雄弁会講談社発行。菊判。冊子体。「少年俱樂部」の少  
女版として、一九二三(大正一二)年一月に創刊された。基本  
方針は「小学校五、六年生を標準とする」、「従来無理と見られて

いた六ヶ月以上の連載小説も可能とすること」、「さし絵の魅力を重視し、さし絵画家を優遇すること」の三点。人気雑誌であった、『少女世界』（博文館）、「少女の友」（実業之日本社）の後発にもかかわらず、創刊号は六万七千部に達したという。その後も人気は衰えず、一九三七（昭和一二）年には過去最高の四九万部という発行部数に達し、最も人気のある少女雑誌として人気を博した。

(2) 当選作曲者は山本芳樹。「応募作品一千篇のうちから信時潔、中山晋平、小松耕輔氏などの選定委員によつて厳選されたもので、来月中に盛大な発表会を行ひ、以後全国に普及をはかることになつてゐる」（『朝日新聞』朝刊 一九四三・四二七）

(3) 一九四〇（昭和一五）年一〇月二日に大政翼賛会結成と同時に中央本部に付置された会議。大政翼賛運動の徹底と国民意見の集約をはかるために開かれた（『国史大事典』デジタル版 吉川弘文館）。

(4) 「日本ニュース 第163号 滅敵へ燃ゆる 統後国民総常会開く」一九四三・七・二十

[https://www.2nhk.or.jp/archives/shogenaarchives/jpnnews/movie.cgi?das\\_id=D0001300548\\_000000&seg\\_number=003](https://www.2nhk.or.jp/archives/shogenaarchives/jpnnews/movie.cgi?das_id=D0001300548_000000&seg_number=003)

(5) 宮里テツ「テツちゃん先生はろくおんてえぶ。沖繩・離島の女教師の記録」一九八六・三 ニライ社

(6) 同じ出版社の『少年倶楽部』も、一〇月号から戦時色が強まる。  
(7) 拙稿「戦時下の茅野雅子（一）——「少女倶楽部」「少女の友」

を中心に——」二〇一八・三 昭和女子大学大学院日本文学紀要第二十九集

(8) 柳原白蓮編 一九三八・九 協和書院「前線の勇士の詠んだ歌を収集すると共に全歌壇の大家を始め全国三百の門弟に呼びかけ、統後の緊張した生活の歌を集め、前線と統後を結んだ歌集を自費上梓し、第一線に活躍してゐる勇士や前線の野戦病院の床に臥す白衣の勇士の許に陸軍新聞班、海軍省軍事普及部を通じておくることになった」（『朝日新聞』夕刊 一九三八・八・八）  
(9) 少女雑誌。宝文館。一九二二（大正一一）年四月創刊。女学校高学年から二〇歳前後の女性を対象にした。

(10) 「戦場より還りて」という七時三〇分からのラジオ番組に「日赤救護看護婦長」の肩書きで出演している。（『読売新聞』一九四〇・二二・二七）また、一九四一（昭和一六）年三月号の『少女倶楽部』に、病院船での体験記「祖国」を寄せている。『塹壕の砂文字』にも古屋糸子の歌が収められており、一九三八（昭和一三）年八月六日の「朝日新聞」朝刊の記事に「今事変には全国から有名無名の歌人が幾多出征してゐるが白蓮女史の弟子の中からも（中略）白衣の天使として古屋糸子、穂坂葉子さん等が出征前線から同女史の主宰している和歌雑誌『ことたま』に歌を寄せると共に」とあることから、燐子の弟子であることがわかる。

(11) 「朝日新聞」広告に「日本赤十字社推薦」とあり、「本書を読んでみんな泣いた男も女も、日本人であるからには、美しき大

和乙女が戦友の血を以て綴つたこの生なましき戦場の記録を涙なしには読めないはずだ。白衣の女性の、出征将士のいな我々日本人一人残らずの心底をはつきり言切つてくれた偉大なる世紀の名著」とある。(朝日新聞「朝刊 一九四〇・七・二九」)

(12) 『少女たちへのプロバガンダ―「少女倶楽部」とアジア太平洋戦争」二〇一二・二 梨の木舎

(13) 『近代日本看護史 II 戦争と看護』一九八四・九 ドメス出版

(14) 三月・四月合併号の目次には木俣修の「まもらん大和島根」が色刷頁の五頁に掲載されているとあるが、同号四三頁に編輯局からの「おことわり」と題して「三月号誌上の「まもらん大和島根」といふ、特攻隊勇士の歌を集めた、きれいな二色刷四頁は、やむを得ざる事故のため、残念ですが皆さんに御覧いただくことができなくなりました」とある。「焼夷弾一発が社屋屋上に落下し、社内特設救護団によって被災をまぬがれる」(「年表・資料 講談社の100年」講談社社史編纂室 二〇一〇・二)「三月の空襲で、『少年倶楽部』『少女倶楽部』は三、四月合併号、五月の空襲で五、六月合併号の止むなきに立ちいった」(「講談社の歩んだ五十年(昭和編)一九五九・一〇 講談社」という記述から、三月九日の東京大空襲の影響が考えられる。

(15) 「大伴氏の言立て『海行かば』の成立と戦争下における受容―その表現および戦争短歌を通じて(戦争と萬葉集)―」『国語と国文学』第千百三十六号 二〇一八・七 東京大学国語国文学会

(16) 「戦争下の歌人たちと『萬葉集』―『歌集新日本領』を通じ

て(戦争と萬葉集)―」『青山語文』第四十七号 二〇一七・三 青山学院大学日本文学会

(17) 「乙女たちの戦争体験 第一回」(「情報やいま」二〇〇八・七 南山舎)

参考 (勝ちぬく誓)ノ唱和ノ仕方並解説二関スル件」昭和十八年公文雑纂 卷九 大政翼賛会関係四」より

われわれは、ぜひともこの大戦争に勝たねばなりません。勝つためには、必勝の自信と必死の努力とが必要です。この二つは、皇国民であり日本人という自信から生れます。「みたみわれ」と口にするとき、皇国のありがたさ、世々の 天皇の御仁愛、われわれの祖先の忠誠と勇武など、皇国に生れた誇りと感激が湧然と胸の中に溢れて来ます。

みたみわれ 大君にすべてを捧げまつらん

大君に、すべてをさ、げまつる決意を「みたみわれ」の自覚から自然に生れます。すべてをと申しても、肝心なものは、生命です。みんなが生命をさ、げまつる覚悟ができれば、不安も動揺もなくなり、前線の勇士と同じに、日本人の一人一人が神兵のやうに強くなります。

みたみわれ すめらみくにを護りぬかん

すめらみくにを護るといふのは、防空、防護などによつて、身を挺して国土を防衛し、この尊き国体、栄ある日本の伝統をどこまでも護りぬくことです。

みたみわれ 力のかぎり働きぬかん

すべての職場が戦場です。国民すべてが戦士です。われわれは力のかぎり戦力増強に働きぬきませう。

みたみわれ 正しく明かるく生きぬかん

戦争生活はあくまで正しく強く明るくなければなりません。みんなが身勝手をやり、不正を働いて一身一家の事だけを考へ出したら、おしまひです。どんなに苦しくても、それを顔に出さないのが、日本人のたしなみです。腹は決死、顔には談笑で行きませう。

みたみわれ この大みいくさに勝ちぬかん

大東亜戦争はやむにやまれぬ正義の戦ひです。皇道宣布の聖戦です。一億の国民こぞつて「みたみわれ」になり切り勇往邁進、最後まで勝ちぬきませう。

「勝ち抜く誓」ノ唱和ノ仕方

一、発声者ガマツ「勝ち抜く誓」トイヒ、会衆ハ同ジク「勝ち抜く誓」ト繰り返スコト

二、ツギニ発声者ガ第一節ノ第一句ヲ「みたみわれ」ト唱へ、ソコデ区切り、会衆ハ同ジク「みたみわれ」ト続ケ、サラニ第二句ニ移ツテ「大君にすべてを捧げまつらん」ト一息ニ唱へ、会衆モソノ通り続ケルコト

三、第二節以下同様にマツ「みたみわれ」デ区切ツテ、唱ヘルコト  
四、最後ノ「この大みいくさ」トイフトコロハ、特ニハツキリ唱へ

ルヤウ気ヲツケルコト

(たかはし・みおり／昭和女子大学女性文化研究所特別研究員)